

解題

曾田三郎先生が研究を開始された1970年代、中国近代史研究は事件・運動を中心とした革命史研究を主流としていたが、先生の関心は当初から中国の社会・経済構造の通時的理解とその基礎に立つ社会の近代化の問題に注がれており、清末の産業政策、商会や立憲派の活動などを扱った論考によって、革命史を相対化し、清末から民国に至る歴史の流れを通観する視点を切り開かれた。また、1980年代より着手され、1994年に『中国近代製糸業史の研究』としてまとめられた近代製糸業研究は、特定産業を対象に資本形成、原料供給、労働管理、輸出市場と流通・経営・技術等の関係などの問題を明らかにした実証研究の嚆矢であり、近代経済史研究を独自の研究分野として確立するものであった。1990年代後半より、先生の研究の重点は、清末から民国初期における立憲改革と近代的政治制度の導入の問題を中心とした政治史研究へと転換している。これらの研究は2009年に『立憲国家中国への始動』としてまとめられたが、同書で提示された、立憲改革における明治日本の憲政の影響、中央集権的行政制度・地方制度の整備、中央・地方関係の調整などの分析視角は、東アジアにおける憲政の伝播と受容、近代以降の中国の統治構造の解明に関わる重要な論点を提供している。

研究対象を大きく転換しながらも、先生の研究には、日本史研究の蓄積に学びつつ、その方法論を運用し、日本との関連および比較を分析視角としている点、中国社会の内部的要素と外部の要素との連関の中で問題を捉え、対象を歴史的・通時的な文脈と同時代の国際的な文脈において把握する点などにおいて、一貫した姿勢が貫かれている。そこには、各国史・断代史・特定分野の枠に立てこもらず、複雑な要素が錯綜する近代社会の実態を、歴史学固有の方法に基づき忠実に再構成しようとする厳格な学術的態度と、日本の学術的財産を継承し、日本人研究者の特性を生かした外国史研究の構築を目指した尖鋭な方法上の自覚を見ることができる。このような研究姿勢と方法的自覚が、複雑で多面的な近代中国の政治と社会の個性を検証する精緻な研究を可能としていると考える。

「曾田三郎先生の研究の歩み」では、曾田先生の研究業績を時系列に並べ、科学研究費等による海外での学術交流活動、海外の大学・研究機関からの訪問者の情報について付記した。また、広島大学総合科学部の助手時代に広島中国近代史研究会の前身となる読書会を立ち上げて以来、研究会の創設から今日までの活動を牽引されてきた先生の足跡を、研究会の歩みに重ねて辿るため、この30年の例会の記録を付した。これらの活動の中で、先生は3冊の論文集を編み1冊の翻訳書をまとめ、近代化と政治統合、日中関係史、立憲改革などに関する科学研究の共同研究プロジェクトを精力的に組織された。この他、先生は折にふれて、後学の我々に対して、その時々 of 学界状況や社会状況、あるいは聞き手の状況に引き合わせながら、研究を行うことの意義や自身の研究を確立していくための道筋などについて、ご自身の経験も交えて語って下さった。「曾田三郎先生の経歴」の後に掲載した先生の文章の内、最初の二編はそのような先生の思いを伝えるものとして収録した。最後の二編は、この機会にご自身の研究を振り返って頂いたものである。

(丸田孝志)